

# GO FLY

新北島中学校  
学年通信 No32

2020.06.29. 発行



「イヤだって気持ち、かっこいい」

演出家：宮本 亜門

人はだれでも、自分の中にいろんな感情をかかえて生きています。たとえば、やさしさ、冷たさ、強さ、弱さ。ボクの中にも、良い部分と悪い部分とがいりまじっています。さまざまな気持ちのバランスがうまくいっていないとき、人はひどいことをしてしまいます。

小学校の5年か6年のときです。雨の日に、5人の仲の良い友だちと歩いていたら、大きなトノサマガエルが道のまんなかにいました。一人がカサでついたら、ひっくり返ってしまいました。もう一人が足で軽くけってみると、体をふくらませました。「おもしろいな」。次の子は少し強くけった。トノサマガエルはボールのように大きくふくらんだ。友だちは次々にカエルをけったり、ころがしたり。最後には、ボクもけりました。

ほんとうはイヤだったんです。生き物をけりたくはなかった。でも、みんなに「やめよう」とは言えないし、「自分はやらない」とも言えなかった。イヤだな、という気持ちにふたをして、笑いながらいっしょにけった。あのときのイヤな気持ちは、今も消えていません。

ひどいことをしているとき、心から楽しいと思っている人はいません。君が、だれかをいじめているとしたら、どこかで、そんな自分をイヤだなと思っていることでしょう。その気持ちにふたをして毎日をすごしているのだろうと思います。

君には、勇気をもって、そのふたをあけてほしいのです。ひどいことをするのはイヤだと感じている君は、とてもかっこいいと思います。君の中にいる、そういう自分を大事にして、とても力のいることだけれど、いじめをやめる努力をしてみてください。君には後悔してほしくないからです。

「それでも、話してみよう」

落語家：林家 正蔵

小学校低学年のときボクはよく友だちから、からかわれました。父親は林家三平という人気のある落語家でしたから、「おまえも何かおもしろいことを言え」とか、テレビにうつる父親の髪形を引き合いに出して「もじやもじやの息子」とか。とてもつらかった。それをだれに相談すればいいのかわからない。父親は仕事が立て込んでいたし、家の人はみんないそがしそうで言い出せない。ずっと一人でがまんしていました。

落語家の家には、住み込みで修業する内弟子という人たちがいて、あるとき一番若いお弟子さんが声をかけてくれた。乱暴な口調で「おい、何かあったろ」って。ボクはつらいことや、いやなことを一気に話しました。とても楽になったことを覚えています。

君の家の人もいそがしいかもしれない。学校の先生も話しづらい雰囲気に見えるかもしれない。でも話してみたらどうですか。わかってもらえないと思ったらまた別の人に話してみてください。君の話を聞いてくれる人は必ずいます。話すことをやめたら、自分の気持ちを人に伝えることはできないのです。

何でも人に話す。それをきちんと聞く。そのことの大切さがわかる大人は、君が考えているよりずっと多いと思います。話すって気持ちのいいものですよ。